宮沢賢治と法華経

平成 29 年 5 月 9 日

敏翁

Ⅰ．法華経を読む

一昨年来の私の「仏説大東亜戦争」論で重要な位置を占める北一輝と宮沢賢治は何れも熱心な日蓮宗の信者だった。

彼らの思想への理解を深める為に、先ず法華経を読んでみる事にした。

1.1　法華経とは

『法華経』は初期大乗仏教経典の 1 つである『サッダルマ・プンダリーカ・スートラ』「正しい教えである白い蓮の花の経典」の意）の漢訳での総称である。

漢訳は、部分訳・異本を含めて 16 種が現在まで伝わっているが、完訳で残存するのは

『正法華経』10 巻 26 品（竺法護訳、286 年、大正蔵 263）

『妙法蓮華経』8 巻 28 品（鳩摩羅什訳、400 年、大正蔵 262）

『添品妙法蓮華経』7 巻 27 品（闍那崛多・達磨笈多共訳、601 年、大正蔵 264）

の 3 種で、漢訳三本と称されている。漢訳仏典圏では、鳩摩羅什訳の『妙法蓮華経』が、「最も優れた翻訳」として流行し、天台教学や多くの宗派の信仰上の所依として広く用いられている。

(以上ウィキペディアより抄録)

『法華経』の成立時期については諸説あるが、中村元は、法華経が成立した年代の上限は西暦 40 年であると推察している。

いずれにしてもゴータマ・ブッダ(BC462～383 頃)や原始仏典の成立(BC257 頃)よりかなり遅れて成立したものである。

ここでは以下この『妙法蓮華経』についての話である。

宮沢賢治が大正 3 年 20 歳の時に始めて読んで感動で身震いしたという法華経は

①　島地大等著『漢和対照　妙法蓮華経』である。

この著作には解説。賛歌などが含まれているが、その「妙法蓮華経」の始めのところは、赤枠をクリックすればご覧頂ける（以下同様)。

この本は、神奈川県立図書館にあるが、据置きで貸し出し禁止である。

上に掲げたものは先日赴いてコピーしたものである。実物は大正 4 年発行のもので保存が悪く、ばらばらになりかけているところもあるものであった。

コピーしたところは、「序品第一」であるが、現代風に言えば「第一章序」ともいうべきものである。

妙法蓮華経は、28 の「品(ホン／ボンと読む)から成っているが、昔から方便品第二、安楽行品第十四、如来壽量品第十六、観世音菩薩普門品第二十五が「四要品」とよばれ、特に重要とされていた。

賢治は特に如来壽量品からインパクトを受けたと言われている。

私は、読み始めて先ず方便品に至り「何だこれは」と驚いた。その詳細は、1.2　法華経私見で話すことにし、取りあえず「現代語訳」で妙法蓮華経を紹介する事にしたい。

現代語訳はいくつかあるが、

② 中村元　現代語訳　大乗仏典２　『法華経』　東京書籍（株）2003 年発行

③ ひろさちや　『法華経』日本語訳　佼成出版社　2015 年発行

④ 正木晃　現代日本語訳　『法華経』　春秋社　2015 年発行

何れも横浜市立図書館から借りたものだが、私が気に入ったのは④である。
それは、現代語訳の外に全体の解説と各品の解説がついていて、それが一般人にも頷けるものと思えるからである。

以下④による、方便品第二の現代語訳、その解説、如来壽量品第十六の解説をご覧に入れたい。

方便品第二の現代語訳

方便品第二の解説

如来壽量品第十六の解説

1.2　法華経　私見

以下、上に掲げた３つの pdf にざっと目を通した方々を前提として話す事にしたい。
上に掲げた(方便品第二の現代語訳)の中で、仏陀はその十大弟子中智慧随一ともされた舎利弗に対して、「私が体得した真理はあなたには理解できないだろうから、かって方便としてあなたにもわかる形で話したのだ」と語り始める。
それで「何だこれは」と驚いたのだ。
また、如来壽量品の中では、釈迦牟尼如来の命は無限だが、それではみんなはだらけてしまうので、方便として涅槃に入ったのであると語るのだ。
ここで再び驚いた次第である。

私の考えは、法華経は大乗仏教の基本経典であり、それは立派な思想かも知れないが、人間ブッダ゜が考えていた事とは無縁に近いのではないかと言う事である。

ここからは、私らしいユニークな議論の展開になる。
「法華経」は私が二十歳前にマルクス「資本論」を読んだとき以来の衝撃的な書籍であり、
いずれも当時の社会通念に対する鋭い攻撃の書であるというものである。

資本論で、労働価値説に読み至った時、商品の価値が労働の量で決まるなど馬鹿げていると思った。
しかし、この考えは一時経済学（特に我国）を支配し、またそれを展開して労働者は搾取されているとのプロタバンダを唱えた共産主義によりロシアをはじめ全世界で数千万人が殺されるか虐待されるに至ったのは諸兄ご存知の通りである。
その間、かって英知の象徴ともされた例えばサルトル等の俊英もそこに含まれる人間の心の底にある闇に気づくことが出来なかった。

法華経もブッダとは無縁の説なのに、我国の仏教界の支配的な考えとなり、日蓮、宮沢賢治、北一輝、石原莞爾、から我らの大先輩である土光敏夫などの強烈な個性を持つ人材の排出に繋がっていった。
この２例は、人間の本質に関わる大きな問題で且つ未だ誰も（？）触れていない領域かも知れないと思っている。

「攻撃的な極論により人間の未知なる力が放出される事がある」とでも要約できようか。
人類進歩への貢献は如何。　その必要充分条件は如何。等々。
この大問題（？）はいずれゆっくり考える事にして以下、本題である宮沢賢治と法華経のテーマについて検討を進める事にしたい。

Ⅱ．宮沢賢治と法華経と日蓮

宮沢賢治は、熱心な法華信者だったから、それを論じた書籍、論評は多数発表されている。
次の書籍⑤～⑧と、以前紹介した**『校本　宮沢賢治全集』**　筑摩書房の
⑨第 12 巻（上）雑纂Ⅰ、Ⅱ　⑩第 12 巻（下）雑纂Ⅲ、⑪第 13 巻　書簡、⑫第 14 巻　年譜など
も再借用し、このあたりで、賢治と法華経の関係を纏め始めた。
しかし検討の中で賢治の法華経は熱烈な日蓮主義のそれである事が分かり、日蓮、田中智学などに関する知識を充足する必要を感じ、以下に掲げる⑬～⑭にも目を通す事になった。

⑤　**八重樫晃編『宮沢賢治と法華経』**普通社　昭和 35 年発行
⑥　**分銅　作　『宮沢賢治の文学と法華経』**水書坊　昭和 56 年発行
⑦　**松岡幹夫　『宮沢賢治と法華経ー日蓮と親鸞の狭間で』**昌平黌出版社　2015 年発行
⑧　**森山　一　　『宮沢賢治の詩と宗教』**真世界社　昭和 53 年初版発行

上記⑤には次の 5 篇が掲載されている。
5a　森　荘巳池　「賢治と法華経の関係」
5b　久保田正文　「法華経について」
5c　紀野一義　　「賢治文学と法華経」
5d　丹羽俊夫　　「賢治の詩と法華経」
5e　菅谷正貫　　「賢治と法華経と科学」

2.1　宮沢賢治　法華経から日蓮に至る

1913（大正 2）年（17 才）、島地大等の法話を聞き感動する。
島地 大等（しまじ だいとう、1875 年 10 月 8 日 - 1927 年 7 月 4 日）は、浄土真宗の僧侶。
1902 年に島地黙雷の養嗣子（法嗣）となり、黙雷亡き後盛岡の願教寺住職となる。
賢治はこの願教寺で法話を聞いたのである。

1914（大正 3）年、熱心な浄土真宗の信者であった父政次郎が持っていた
①　**島地大等編著『漢和対照妙法蓮華経』**を読み感動する。
この「序品第一」の始めのところは既にご覧に入れた。
賢治は特に如来壽量品第十六からインパクトを受けたのである。

1918（大正 7）年、妹トシが発病、年末に母と共に上京、翌年 3 月まで看病の為滞京。

1919（大正 8）年、滞京中に、国柱会館（上野桜木町 1 丁目）を一度訪れ、田中智学の講演を聞いている。それで智学にすっかり魅せられたのか、

智学の著書**『本化攝折論』**（明治 35 年発行）と『日蓮聖人御遺文』から抜粋した
『攝折御文　僧俗御判』を編んだ。(⑨)

1920（大正 9）年、「国柱会」の信行員となる。

田中 智學（たなか ちがく、田中 智学、1861 年 12 月 14 日（文久元年 11 月 13 日） - 1939 年 11 月 17 日）は、第二次世界大戦前の日本の宗教家。

人物概要は次のウェブから解るが、これは現在の価値観によるもので、その時代感覚には頷けないところがある。

田中 智學

私は次の書籍を勧めたい。

⑬　里見岸雄監修　日本国体学会編　『日本の師表　田中 智学』錦正社　昭和 43 年発行

2.2　日蓮の折伏重視と宮沢賢治

話が横道に入る感はあるが、ここで「攝折（しょうせつ)」と日蓮宗との関係について触れる事にする。これは、摂受（しょうじゅ）と折伏の事である。

仏法を布教するには、この二つの方法がある。

『摂受とは、折伏に対する反対語。心を寛大にして相手やその間違いを即座に否定せず反発せず受け入れ、穏やかに説得することをいう。

また折伏とは、悪人・悪法を打ち砕き、迷いを覚まさせること。人をいったん議論などによって破り、自己の誤りを悟らせること。あるいは、悪人や悪法をくじき、屈服させることである。』(ウィキペディア)

日蓮は、末法のこの世では、折伏が重要だとして四箇格言（真言亡国、禅天魔、念仏無間、律国賊）を掲げて折伏を行った。

しかし徳川家康はこれを認めず、以降明治初期までの日蓮宗はその存続の為に攝受を旨とせざるを得ない状況にあった。

これを激しく論難して日蓮に戻る活動を始めたのが田中智學であり、その考えは**『本化攝折論』**に纏められている。

これは、現在　**⑭　田中智學　『折伏とはなにか』**真世界社　昭和 43 年発行
に収まっている。

ここからは一部私の想像も入っているが、賢治は智學の講演に触発されて『本化攝折論』を読み始め重要と思われる文章をノートに書き写した。

これが**『攝折御文　僧俗御判』**の前半（⑩pp348－354）で、ここから日蓮についてさらに知りたくなり**『日蓮聖人御遺文』**を求め（賢治の蔵書になっていた）を熟読し、ここでも重要と思ったところをノートに書き写した。それが『攝折御文　僧俗御判』の後半（⑩pp354－362）である。

賢治の書き写しの特徴の一つは、『本化攝折論』において智學の論理の展開（これも快刀乱麻の趣があるのだが）そのものは書き写さず、引用されている経文と聖人遺文のみに限っている事である。

特徴のもう一つは、原著を忠実に書き写したものではなく、原著にあるルビなどは省略し、経文では『本化攝折論』の返り点、総ルビ付きのものが白文になっている。

ここでは、失礼ながら古文に余り明るくないと思われる諸兄（小生も似たようなものではあるが）の為

もあって『本化攝折論』の中から賢治が書き写したものを２点（何れも聖人遺文）ご覧に入れたい。

（1）**開目抄**

┌┐の下に「開目抄」と「如説修行抄」が重要な二書である事が記されている。

┐から└まで（括弧内は除く）が賢治が書き写した部分。

（2）**如説修行抄**

┐以降が賢治が書き写した部分。

上掲開目抄の終段に「末法ニ摂受折伏アルベシ」とあり、これは摂受も折伏も認めている様に読め、如説修行抄の方が折伏重視の様に思える。

しかし、本化攝折論の中で智學は、その様に読むのは誤りであるとした。

即ち、前者は義判を主とするもので、後者は応用を主とするであり、意趣は同じであるとしている。

この義判とは日蓮特有の議論の進め方で、文をそのまま読んでは駄目で、「義」（経文などに隠れた深義）によって文を判じなければならないとするものである。

この議論には違和感があったが、それは私だけでなく、日蓮宗の高僧達にもそう考えた者が居た。

その代表として日重（1549～1623　安土桃山時代から江戸時代前期にかけての日蓮宗の僧摂受主義の教義を発展的に継承した）を智學は本化攝折論の中で「売国の奸」とまで激しく攻撃している。

この本は、仏教や日蓮特有の用語が多く完全な理解は難しいが、この様に議論は鋭く中々面白い読み物で、関心をお持ちの方には一読をお勧めしたい。

日蓮宗は多くの派に分かれていて各派間の対立も激しいことで知られている。

この攝折問題で少し調べてみた。

一般的には、聖人遺文の中で開目抄は再重要なものの一つとされている様だが、折伏を重んじる「日蓮正宗」のホームページにある聖人遺文の解説

日蓮大聖人御書

では、開目抄（114 番）の解説は無く、如説修行抄（140 番）は詳しく解説されている。

少し話が更に逸れるが、創価学会はかって日蓮正宗の中にあったが、1991 年に破門されている。

また国柱会は現在もかっての勢いはないが活動していて、ここも創価学会を激しく攻撃している。

創価学会の少し前まであった激しい折伏運動は、日蓮が唱えていたものとは異なるもののようである。

⑭のあとがき（田中香浦<智學の孫　⑭発行時国柱会会長>による ）によれば、

「戦後日本の混乱期に、通俗なる現世利益と罰論をふりかざして民衆の中に創価学会という迷信団体がひろがっていった。この団体は、その罰論で人々を脅かして強引に改宗せしめる布教活動を称して「折伏」といい、世の中の顰蹙を買ったのである。

日蓮聖人の折伏懸化導の真義と日蓮主義信仰の真価を世に誤解せしめたその罪は大きい」

とある。

では日蓮の考えた折伏とはなんであったか。簡単に纏めてみた。

上記開目抄の 7 行目あたりに「邪知謗法ノ者多キ時ハ折伏ヲ前トス常不軽品ノ如シ」

とある。これは日蓮が始めて述べた言葉で日蓮主義による折伏の定義の根源をなしているという。

「常不軽品」とは法華経・常不軽菩薩品第二十　を指している。

その中には、折伏という言葉は全く出て来ない。

この経文の主要部分を、**要約法華経　常不軽菩薩品第二十**　　から抽出する。

『正法が滅したのち、一人の菩薩が現われた。人びとはこの菩薩を常不軽 じょうふきょうと呼んだ。
というのもこの菩薩は、相手が男であれ女であれ、 僧であれ在家であれ、人を見てはみな礼拝し
賛嘆してこう言ったからである。『みなさん、わたしはあなたがたを敬います。 軽んじません。
なぜなら、あなたがたは菩薩の道を行じて、仏となるからです』こうしてこの菩薩は、経典を読誦
することなく、 もっぱら人びとを礼拝するばかりであった。会う人ごとにこのように言うので、
人々は怒り出し、しまいには棒で打ち石を投げる 有様であった。しかしこの菩薩は怒ることなく、
逃げ出して遠くに行くと振り返って、『あなたがたを敬います。軽んじません。 あなたがたは仏に
なります』と遠くから大きな声で言うのであった。こうして人びとはこの菩薩を常不軽と呼んだので
ある。』

以上について本化攝折論の論を要約すると次の様になる。

『この礼拝が即ち、折伏である、人々はこれを嫌だと言って怒り出すが、それは彼らの邪見謗法で
あって、即ち仏道を拒むものであるから、これを覚醒規練擦る為に礼拝するのである、
この強硬的礼拝は実に大義的顕正であると共に、名分的大打撃である、折伏行動の粋ともいうべき
所作であるのだ。』

これが日蓮主義による折伏のあり様で、創価学会の解釈とは全く異なる事がわかるであろう。

以上述べてきた様に折伏の捉え方には多くの立場があるが、賢治の場合はどうであったか。
若い賢治は、父政次郎を激しく折伏しようとしたようだ。

ぼろぼろと ／ 赤き咽喉して ／ かなしくも ／ また病む父と ／ いさかうことか

と、歌っている。
「毎日、毎日あまりひどく争うので、母をはじめみんなで心配しました。ほかの親子も、親子
というものはこんなにあらそうものかと思った」---
というように、家族をおろおろと心配させるほど、強烈を極めた。(⑧)
⑧はこのエピソードの出典を明らかにしていないが、無断上京前、1920 年頃の話だと思う。

⑧で森山は、日蓮主義による法華経と折伏の関係についてこう述べている。
『興奮性の賢治が夢中になって、折伏をして歩いた事について、案外に無関心に見過しているが、
単に彼がファナティックで、と片付けるわけにもいかない。
日蓮主義法華経は、摂受折伏を除いては、骨抜きになる。 無意味なものになる。
折伏、折伏と言ったり、聞いたりしてはいるが、折伏が何を意味するかを、理解することが入信の
序門である。 摂折を解さない者、賢治の詩と法華経を語るべからずといってもよい程である。
日蓮聖人の折伏は、 「超悉檀の折伏」といって人を教化するための方法といった意味を超えた
無縁の慈悲の発動、折伏立行であることを心に深くきざまなくてはならない。 』

2.3 宮沢賢治における法華経と文学

1921（大正 10）年（25 才）、1 月無断上京。国柱会を訪れ高知尾智耀に面会。
賢治は後にその死も間近いころ手帳に次の様な「覚え書」を記している。

高知尾師ノ奨メニヨリ ／ 法華文学ノ創作 ／ 名ヲアラハサズ
報ヲウケズ ／ 貢高ノ心ヲ離レ （「雨ニモマケズ手帳」* 135 頁 ⑨ p 72）

X
筆ヲトルヤマヅ道場観 ／ 奉請ヲ行ヒ所縁
仏意ニ契フヲ念ジ ／　然ル後ニ全力之ニ従フベシ

断ジテ教化ノ考タルベカラズ!
タダ純真ニ法楽スベシ ／ タノム所オノレガ小才ニ非レ
タダ諸仏菩薩ノ冥加ニヨレ　（「同手帳」139～140 頁⑨ p 73）

上記「覚え書」に関して紀野一義は（4c）の中で次のように記している。
『法華経の信仰を文学に結びつけての法華文学の創作ということを明確に自覚したのは、
やはり国柱会の高知尾智耀のすすめによるところが大きかったようである。
その時期は大正十年、賢治が二十六歳の冬のことであった。 このとき以後の賢治の
文学活動はすべて法華経信仰に基づくものと考えてよいであろう。
しかし賢治は文学によって法華経の教化をしょうとは夢にも 思っていなかった。
「ただ純真に法楽する」ことだけがその目的であった。 書けば書くほど、法華経の深さ
尊さが身にしみ通り、喜びが深まって行くから、書かずにはいられないという書き方で
あった。』
この事によって、賢治の童話を直接法華経に結び付けるのは困難である。
それで（5c）、（5d）、⑧など賢治の文学と法華経の関連についての論説は殆どすべてが
賢治の詩に限られている事になっている。

賢治と「国柱会」の関係については、⑦が詳しいが、「国柱会」のホームページ
にもある。

宮沢賢治

ここには、高知尾師の『宮沢賢治の思い出』も掲載されている。
その中から重要と思われる部分を抜粋する。
『私には法華文学の創作をすすめたという明確な記憶はないが、いろいろ信仰上の意見を
交換した中には、当然私が田中智学先生から平素教えられている、末法における法華経
修行のあり方について、熱心に話したことと思う。
すなわちいわゆる出家して僧侶となり仏道に専注するのが唯一の途ではない、
農家は鋤鍬をもって、商人はソロバンをもって、文学者はペンをもって、各々その人に
最も適した道において法華経を身によみ、世に弘むるというのが、末法における法華経の
正しい修行のあり方である、詩歌文学の上に純粋の信仰がにじみ出るようでなければならぬ、
ということを話したように思う。
それを聡敏な賢治は、私が法華文学の創作を勧奨したと受けとったのであろう。
それが「高知尾師ノ奨メニヨリ　法華文学ノ創作」となったのではなかろうか。』

賢治は生涯、「国柱会」、その創設者である田中智学の考えを信じていたのだが、
戦後、その国家主義的思想を賢治が信じていたとなると具合が悪いと考える者が

殆どになり、賢治は晩年「国柱会」から離れて行ったとするのが通説になっているが、
それは事実ではない。
解り易い例を挙げると、妹トシの分骨は 1923 年に国柱会最勝閣に納骨しているし、
賢治の霊名「真金院三不日賢善男子」は国柱会から授与されたものである。

2.4　宮沢賢治の遺言と臨終

1933（昭和 8）年（37 才）9 月 21 日　父に次の遺言。午後 1 時 30 分静かに眠るように入寂した。
遺言は、「国訳の法華経を千部印刷して知己友人に分けて下さい。…
お経のうしろに次の言葉を書いて下さい。」というものだった。

⑮　宮沢清六発行　『国訳妙法蓮華経』昭和 9 年 6 月 5 日発行
これは、①の和の部分のみを印刷したものである。
私は、国会図書館にあるものを、県立図書館のパソコンから閲覧した。
和綴じ、柿色の表紙、黒紫の文様の入った帙に入った 290 頁強のものである。
図書館でプリントしてもらったものは、画質が良くないが「序品第一」の始めのところを
ご覧に入れる。

国訳妙法蓮華経

この最後には、次の言葉がある。

合掌
私の全生涯の仕事は此経をあなたの御手許に届け
そして其中にある仏意に触れてあなたが無上道に
入られんことをお願ひする外ありません
昭和八年九月二十一　日
臨終の日に於て
宮沢賢治

以上は兄の全生涯中最大の希望でもあり
又私共に依託せられた最重要の任務でも
ありますので今刊行に当たりて
謹んで兄の意思によりて尊下に呈上致します
宮沢青六

尚、（5a）による遺言の後の次のシーンには胸を詰まらせるものがある。
『父は、「たくさん書いてあるあの原稿は、どうするつもりか？」
と、たずねた。 賢治は、戸棚の中にある原稿について、
「あれは、みんな、迷いのあとですから、よいようにして下さい。」
と、答えた。
父は、もしも賢治が、そのたくさんの童話や詩を、本にして出してくれとでも云ったら、
大声でどなりつけてやろうと思っていたのだ。

お逮夜の夜、御飯をいただく席で、私はこのことを政次郎翁からきいた。
父は、そこで、「おまえのことは、いままで、一ぺんも、ほめたことがなかった。
こんどだけは、ほめよう、りっぱだ。」
彼は、生れて三十八年目に、その死の直前にはじめて、彼の父から、ほめられたのだ。
「お父さんに、とうとう、ほめられたもや。」
と、弟の清六氏に、賢治は云った。 彼はほんとうに、心から嬉しそうであった。』

2.5 終わりに

調べて行くうちに、日蓮、折伏問題、田中智学と国柱会などについても、もう少し理解する必要が感じられ、調べ始めると止まらなくなり、この程度まで至るのにだいぶ時間を要することになった。

本題では、話を出来るだけ折伏問題に絞って、触れるのを避けたが、実はもう一つ重要と思われる賢治の日蓮宗熱中に関する話がある。

賢治は、1920（大正 9 年）24 歳の時、田中智学の**『本化妙宗式目講義録』**を 5 回も繰り返し読んでいたとの証言がある。(⑫p529)

この本は 5 巻からなり、全 3000 頁もあり、初心者には難解なものだそうだ。
この書籍は、現在**『日蓮主義教学大観全六巻』**国書刊行会　に収められているらしい。
それで私も一度見てみたいと思ったが、県立、市立両図書館には置いてなく、残念ながら
未だ見る事は出来ていない。
またウェブにも紹介されていないので、ここでは以下⑧による説明に留めたい。
『「本化妙宗式目講義録」は、名義・ 大綱・ 宗要・ 信行・ 安心の五大門、以下十六段・
八十科に分類、実に精緻に構成され、徴に入り細を極めた日蓮主義史に生彩を放つ、体系
の指導書である。 日蓮聖人の宗教宗旨を条理整然と組織的系統に排列整備したことは、
700 年来未だかってない快挙である。（中略）
全巻三千余頁に及び一論明快、情感ゆたか、想雄渾の中に緻密な論理の組立て、具体的であり、
賢治が引きつけられたことがよく諒解出来る。（中略）
賢治はこの『本化妙宗式目講義録』を読みながら、題目をあげ、折伏修行に打ち込んだのだ』。
この書籍は、仏教学の権威宇井伯壽（中村元は弟子に当たる）も「日蓮教学を学ぶには必読」
としたのだが、この種の書籍の収蔵では信頼している県立図書館にも無いのには、
時流に合わないものは容赦なく消し去られていく時代の流れの恐ろしさを、今更ながら感じざるを
得ない。

若干話は変るが、関連事項を調べてウェブの森を彷徨っている中で、
日蓮主義と、その鬼子ともいうべき創価学会について批判的だが面白い論評をみつけた。
『立正安国論に見る日蓮のカルト性』　である。
この論によると、「もし、修正的に実践する事なく、ストレートに、日蓮の教えのまま
に突き進めば、創価学会や顕正会（これも日蓮正宗から破門されている）のようになる
事が当然である。」とある。立正安国論についても、その論理の無茶苦茶ぶりが細かく指摘されている。
興味をお持ちの方には一読をお勧めしたい。

これは 1.2 節に述べた私見の延長になってしまうが、Ⅱ章を乱暴に要約すると
『釈尊とは全く無関係のとんでもないお経である法華経が、日本に至って法華経を更にとんでもなく拡大解釈した怪僧・日蓮を生み、また明治以降この日蓮主義を復興発展させた傑物・田中智学を生んだ。
その影響は、宮沢賢治、石原寛治、土光敏夫から現代の創価学会にまで及んでいて、日本独特のアグレッシブ大乗仏教とも言える精神構造を形作っている』となるか。

尚、宮沢賢治に関しては膨大な研究、論評が発表されているが、まだ新しい発見があるらしい。
去る 5 月 6 日 NHK 教育 TV、こころの時代で放送された「宮沢賢治　はるかなる愛」
では、詩人吉増 剛造が**『宮沢賢治　愛のうた』**の著者沢口たまみ　とともに賢治は恋人がいて
それが、詩集『春と修羅』で極めて重要な意味を持っている事を解明している。
尚、放送後、慌てて横浜市立図書館を調べたが既に貸し出し中だった。
但し、上掲書の発行は 2010 年だから私の検索に漏れがあった事にもなる。
上掲書入手後、それを含めた考察を行ってみたいと思っている。

註　*:「雨ニモマケズ手帳」その 51～60 頁に有名な「雨ニモマケズ…」の詩が書かれているため
そう名付けられた。(⑨)